

松久卓

# 加津佐に創設した活版印刷所

- ヴェネツィアから長崎まで -

15世紀の半ばに現在のドイツは神聖ローマ帝国として国内は揺れ動いていた。金細工師であったグーテンベルグは金属活字による印刷術を発明し、南部のマインツに印刷工房を開設して書物の生産を始めた。時に1455年のことである。その後活字による印刷術はヨーロッパ各国へ急速に伝播して、50年間に800万冊の書物を生産するに至った。中でもイタリア北部の都市国家、ヴェネツィア共和国では印刷術の普及と生産が群を抜いてヨーロッパ屈指の印刷・出版大国となった。それまでの手作業による写本製作の世界から抜け出して、金属活字の鑄造とグーテンベルグ式印刷機による効率的な生産と量産によって書物が大量に迅速に作れるようになって、印刷・出版業という新しい産業が生まれた。情報革命が出現したのである。

1200年代にヴェネツィア共和国の商人マルコ・ポーロは遠く中国まで旅行して、大都（現在の北京）で元のフビライ皇帝に役人として採用された。17年間の積極的な働きによって皇帝に勤務態度を高く評価されたが、ヴェネツィアへ帰国して「東方見聞録」という旅行記を著し「ジパングの宮殿は金箔で飾られている」と日本を紹介した。これが東洋諸国、なかでも日本への熱いまなざしとなって、イタリア、スペイン、ポルトガル諸国ら海洋民族に日本をはじめ東洋諸国へ目を向けさせるきっかけとなった。マルコ・ポーロはヴェネツィア共和国の西方、海洋貿易を主力とするジェノヴァ共和国の牢獄でこの書物を著したが、その本を読んだジェノヴァ共和国の航海者コロンブスが黄金の国ジパングを目指して大西洋を西進し、バハマ諸島の一つの島に到着し、ここが日本だと信じていたほどである。さてこのように地中海周辺の国々は日本と東洋諸国は遥かに彼方であるが海外進出を考えていたのである。

1585年ヴェネツィア共和国のサン・マルコ広場に向かっていた日本の遣欧使節の船は百十八の島、百五十の運河、四百の橋という景観を縫って歓迎の多数の船に囲まれながらヴェネツィアの大運河に入った。運河の両岸には立錐の余地なく大観衆がひしめいていた。このヴェネツィア共和国は遣欧使節の指導者アレキサンドロ・ヴァリニャーノの出身国であった。

1582年（天正10年）2月20日ヴァリニャーノと使節一行は、長崎港から当時としては巨船という1,000トンのポルトガル船でポルトガルのリスボン港をめざして出航した。当時13歳であった使節の少年の親にヴァリニャーノは「必ず無事にあなた方の子供を4人とも日本に連れて帰る」と約束したという。1584年8月10日船は念願のリスボン港に到着した。その間、途中ポルトガルの植民地のいくつかに寄港して長い月日を要したが、船がポルト

ガルに近づくにつれイギリス、フランス、オランダの海賊船の襲撃を警戒して、海路を大きく迂回して危険な航海をつづけた。リスボン港に上陸後使節一行は陸路をとり、途中アリカンテからスペインの巨船に乗り、地中海を東進してイタリアのトスカーナ公国のリヴォル港に上陸した。使節一行は広大な法皇領を通過してローマに到着し、教皇グレゴリオ13世に謁見を賜われることが出来た。4人の使節は伊東マンショが豊後（宮崎県西都市）、千々石ミゲルは肥前（長崎県千々石町）、原マルチノ（長崎県波佐見町）、中浦ジュリアン（長崎県西海町）の出身であった。いずれも九州の戦国大名の豊後の大友宗麟、肥前の大村純忠、同じく有馬晴信らキリシタン大名の名代として近親者の少年4人を選んで遣欧使節としたのである。使節一行がヴァリニャーノによって西欧世界へ派遣された目的はヨーロッパのキリスト教の国々が、どんなに輝かしいかを将来性のある若者に見せようということと、ヨーロッパの貴人から布教のため日本の教会への援助を仰ごうとのことであった。ローマを後にして北上を続けた使節一行は、ヴェネツィアの町に豪華船で到着すると花火、祝砲が打たれて人々から大きな歓迎をうけた。ヴェネツィア共和国は当時ヨーロッパの諸国は君主制や王制の国が多いなかで、自治による都市国家として共和制を採用して大統領が独裁に陥らないよう集団指導制をとり入れて政治を行っていた。また言論や宗教に干渉しない自由な国家をめざして海外貿易を盛んにして富は増え、使節が訪れた当時はヨーロッパ屈指の強国の一つであった。ヴェネツィア共和国では日本人の訪問は初めてのことであったが、前述のマルコ・ポーロの著作から「極東のジャポージ」と呼んでいた日本から王子たちが、ローマ教皇領に来ていることを耳にした大統領が自国へ招かせることにした。明けて1585年（天正13年）6月28日、第86代ニコロ・ダ・ポンテ大統領は金色燦然とした大統領宮殿の大会議室で、黄金の刺しゅうを召した大統領へ4人の少年使節は歩み出て日本風に挨拶した。大統領は「母国に帰った上は、ヴェネツィアが貴殿らの顕栄なる国王に最大の好意を有すると伝えられたい」と挨拶し、使節らに最高の寵遇を約束された。使節たちは大統領のもとに進み出て「ローマから日本への帰路にあたり、是非ともヴェネツィアを見たくて来訪した」と次第を述べ、大統領をはじめヴェネツィア当局者の好遇を深く感謝した。この後使節たちはヨーロッパ見聞記の中で、ヴェネツィア共和国に最も多くのページを充てている。使節の一人、千々石ミゲルは帰国後、ヴェネツィア共和国について「その美しさにおいて、建物の多いことにおいて、技術の巧みなことにおいて、これに比肩し得るものは存在しなかった」と語っている。使節一行は7月9日海を渡ってヴェネツィア共和国のヴィチェンツァへ移動した。市民の歓迎は大変なもので心身をあげて喜びを表わしたという。その日、ルネサンス時代の建造物の一つで4ヶ月前に完成したばかりのオリンピコ劇場において、盛大な日本使節歓迎式典が開催された。劇場は有名なアンドレア・パラディオの設計で、後世劇場建築の原形となった。舞台は野外劇場風で街路の風景と観客席は半円形で後部に列柱がずらりと並べられている。使節一行は観客席の最前列中央に着席した。劇場は満席で舞台では少女の団がトロンボーンなどの楽器演奏をしたあと、学士院会員の一教授が「最も遠い地のはなはだ有力なる王たちが使いを派遣された」

と使節一行の歓迎の演説を行なった。この時の様子は観客席の手前の部屋にフレスコ画となって描かれていて、400年余を経た現在も飾られている。このオリンピック劇場は最近補修されて、日本の遣欧使節を迎えた劇場として現在も音楽、演劇、歌劇が公演されている。現存する世界最古の劇場として、オリンピック劇場と周辺の旧市街は、ユネスコの世界遺産に指定された。

遣欧使節のヴェネツィア共和国訪問について述べてきたが、渡欧の更なる目的があった。それはヨーロッパ各国に普及した活版印刷術を日本に導入して、イエズス会のすすめる布教事業に活用することであった。ヴェネツィア共和国は自治独立の気風が強く、ローマのキリスト教の検閲をも認めなかったため、印刷・出版の規制も緩やかで、周辺の国々から知識人を招くことが出来た。そしてあらゆる種類の書物が印刷・出版されるようになった。それは古典作品や宗教的作品のみでなく、小説から料理入門書に至るまで、さまざまな言語により印刷・出版され、ヨーロッパ各地に広がった。また金属活字については、当初マインツで印刷術が発明された頃にはゴシック体活字が使われたがその後、印刷術がヨーロッパ各国へ普及するに従い、次なる書体として欧文の明朝体ともいえるローマン体活字と、右斜めに傾いたイタリック体活字がヴェネツィア共和国の印刷者により開発され、その後ヨーロッパ各国へ普及し現在も世界中で使用されている。使節一行のヨーロッパ訪問を企画した巡察使ヴァリニャーノは、若くしてヴェネツィア共和国のパドヴァ大学に学び法学を修めた。印刷業・出版業が盛んになったヴェネツィア共和国は、加えて製紙業が勃興して印刷所が次々に開設され、ヴェネツィア共和国のみで150ヶ所を超えるに至った。これはそれ以外のイタリア全土の印刷所数を上回っていた。折からルネサンスの全盛の時代でヴェネツィア共和国政府は学問と芸術の育成に注力した。かかる文化豊かな環境のもとで居住していたヴァリニャーノは印刷技術の成果に深い関心をもっていたのである。ヴァリニャーノは1579年から1582年に至る日本の九州に存在中に、活版印刷になくはならない活字について和文活字の鑄造の可否について関心を寄せ、インドのコチンでポルトガルの宣教師ジョルジ著「教理問答書」がマラバール土語に翻訳され、続いてマラバール土語の活字が新しく鑄造されることになった事実から、ヴァリニャーノはその成功を期待していたのである。ところがいよいよその活字によって書物の刊行がされたことを知ると、あの複雑なマラバール土語でさえ活字にできるなら日本の楷書や行草体の漢字、あるいは仮名文字の活字の如きは、鑄造して活版印刷所に使うことは望みなきに非ずとの結論に至った。このことからヴァリニャーノは活版印刷所に係わる印刷機械や諸器材を導入すれば、邦文印刷の漢字及び仮名活字の鑄造と印刷の見通しは明るくなったのである。

ヴァリニャーノはパドヴァ大学を卒業後、イエズス会に入会した。イエズス会はカトリック教会の復権を目指して1534年に結成された修道会で、ポルトガルの後援を得て世界中への布教活動を行っていた。ヴァリニャーノはローマ学院で哲学や物理学などを学んだ後1570年に司祭叙階となり1573年イエズス会総長によって、総長メルクリアンの名代ともいうべき巡察使の大役に任ぜられた。当時東アフリカから日本までの広大な地域が巡察対象

の東インド管区であった。イエズス会は当時混迷し腐敗していたカトリック教会の内部刷新を強く自覚して生まれたもので、創立者のイグナティウス・デ・ロヨラがもと軍人であったこともあってその精神はローマ教皇の命に絶対的に従い、世界中を軽騎兵のように駆けて行動し、機動的に宣教する修道会であった。清潔、貞潔、従順に加え、法皇への従順を旨とし救霊と実徳のために生命を賭して働く僧侶の自覚的な規則をもった宗教団体であった。16、17世紀にスペイン、ポルトガルの神学者たちの一般的な見解として、他の人々の苦難をものともせず働くことに徹するのが目標であった。またイエズス会は学術研究と教育の実践に力をそそぐことで知られていた。最初に日本に到着したフランシスコ・ザビエルはヨーロッパの最高学府ソルボンヌ大学出身の英才であったし、つづいて来日した宣教師アルメイダは日本に医学の知識を導入して外科医術を施し救癩病院を建設した。また宣教師ラモンはキリスト教の教育機関で全寮制の中学、高校にあたるセミナリヨを日本に設置して校長として語学、文学に加えて音楽や演劇を教え、さらに西洋絵画や銅版画の技法を教えた。また宣教師スピノラは大学の教養学部程度の教育機関コレジヨで数学及び天文学を講義した。このようにイエズス会は学問、知識を日本に導入したが、ザビエルの来日30年後に巡察使ヴァリニャーノという企画と行動を具えた精鋭が日本の口之津に到着して、日本の実情を考慮しながら将来に向けた壮大な布教計画を立案したのである。

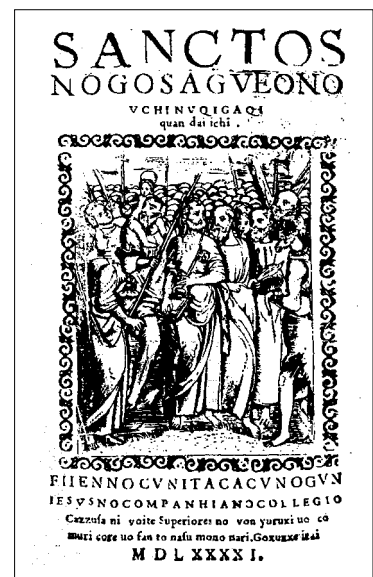
当時ヨーロッパの知識、技術は各分野に及んでいて医術、薬学から印刷術、航海術、造船術、測量術、天文術さらには音楽、絵画、彫刻にまで広がっていた。

ヴァリニャーノは日本に於けるキリスト教の布教の状況を視察した結果、改革案を考えて実行に移した。その一つが学校の創設と教育の確立であった。そこで使用される教科書は、あらゆる観点から編集されたものでなければならぬと考えたのである。学習の効果があがるように筆写による教科書作りを避けて、当時ヨーロッパ各国で行われていた活字を使用した印刷術の導入を企画した。そして1582年天正遣欧使節がヨーロッパへ出発する時にヴァリニャーノは九州諫早出身の日本人少年で金細工師出身のコンスタンチノ・ドラードを印刷技術習得のため使節たちと随伴させ、ポルトガルへ向わせた。使節らはヨーロッパ諸国からの帰途、ローマから連れ帰った印刷技術を割合に知っているジョアン・パウティスタ・ペーチェとドラードはインドのゴアで、印刷技術に詳しいブスタマンテ神父から活版印刷術を習得した。次の上陸地マカオでも使節に随伴したロヨラ修道士やアウグスチーノも印刷技術を学びゴアとマカオで計3種の書物を印刷・出版した。しかしロヨラ修道士は日本文学に長じ文章も巧みであったが8年にわたる旅の途中、肺を患ってマカオで客死したことは惜まれる。マカオからの手紙によると4人の使節の1人「原マルチノはラテン語の勉強が目立って進み、またアウグスチーノは印刷に従事している」とある。

1590年（天正18年）7月21日使節一行は8年有余ぶりに長崎港へ帰着した。ポルトガルのリスボンから運んできた印刷機と諸器材はその後、南進して島原半島の加津佐に陸揚げされて神学生たちによって水月（みなづき）のはずれの丘の上、加津佐のコレジヨ内に運ばれたのである。この時の様子を原マルチノは「印刷機は寺の庫裡にあたる広い土間の真

中に置かれていた。一隅に積まれた万力や活字、母型を入れた箱や紙の入った樽などがまだ所を得てないせいか、単なる鉄の物体でしかなく、マカオで生あるもののように活動していた機械とは別物のようだ。グーテンベルグの印刷機が東洋の一王国の南端の古寺めいたコレジヨに牛の死骸みたいに放置してある様は異様である」と述べている。また印刷技術を遣欧使節に同行して、イタリアのジェノヴァ共和国やポルトガルリスボンの印刷所で活版印刷術を学んだドラードは「リスボンで買入れた印刷機は加津佐のコレジヨで、まだ荷ほどきされずにある。早く書物の印刷・発行にかかりたい」と日記にある。このように原マルチノやドラードが書物の製作を望んでいた頃、コレジヨ内では編集委員会が毎夜行われ、キリスト教布教のための書物の刊行予定を協議していた。その結果12点の教科書、宗教書、文学書らの印刷・出版計画を策定した。最も必要と指摘された書物は教理書、修養書、キリシタン学校の教科書で、次が外人宣教師のための語学書であった。ヴァリニャーノ巡察使は早速印刷・出版事業にとりかかるよう指示を行い、いよいよ加津佐のコレジヨの付属印刷所で聖人伝の書物「サントスの御作業の内抜書」の刊行に着手した。この時の様子を原マルチノは次のように記している。「加津佐コレジヨの第1回出版物として「サントスの御作業」がとり上げられることになった。先ず20篇を選び、養方軒パウロ師が新たに日本語訳しその子息の洞院ヴィセンテも手伝っているらしい。更にこれを我々がローマ字に直してゆく。昼も夜も、蟻の列にも似たローマ字を並べている。世上には豊臣秀吉の連合軍がやがて九州へ（朝鮮出兵に備えて）駐留してくるだろうとの評判が高まっていた」と。

1591年（天正19年）11月のドラードは日記の中で日本最初の活版印刷の状況を述べている。「昨夜、「さんとすの御作業の内抜書」刷り上る。淡青色の表紙にて袋綴じとし、扉1枚イエズス会の紋章を入れ左右に年号と「加津佐コレジヨ刊」の文字を1行ずつに飾る。薄葉の鳥の子紙にキリスト御像の銅版画を刷り挿入する。俺としてはもっと画を入れたかったが今の状態ではそこまでの余裕はない」と。ドラードも言っているように1591年秋には豊臣秀吉は朝鮮出兵、ひいては明国への遠征まで考えるようになり、武士も商人も儲け口が到来と日本中がバブル景気に湧いた。一方イエズス会の布教活動は武士が全国から九州名護屋城に集まるなか、諸資材を求めて島原半島の南端にも現れて布教活動を探られるなど不穏の空気が流れて治安は内乱の様相を呈していた。その結果加津佐のコレジヨの印刷所も武士の襲撃の気配が感ぜられるに至った。こうした中「サントスの御作業の内抜書」は国語をローマ字式に表現したもので、ポルトガルから母型と共に船で運んできたローマン体活字を使用して組版を行っ



「サントスの御作業の内抜書」の扉絵・ローマ字本  
加津佐版

ている。第1巻が294頁、第2巻が340頁に及ぶ著作で、用紙の和紙は漉きが良くないためドラードをして「用紙の不足は残念だ。インキが粗密であって、会心の刷り上がりではない」と述べている。このようにしてグーテンベルグ式印刷機を用いて1591年島原半島南端の加津佐において日本最初の活版印刷が行われた事実は、長崎県島原城天守閣に展示されている歴史年表の中に見ることが出来る。

ドラードは活字については「木活字もどンドン作った。片仮名は金属活字が鮮明である。金属活字の鋳造の用意などしている。歌物語や消息文などには木活字の平仮名がよい。従来大きな版木による印刷ではなく、一字一個の活字を組み合わせ縛って使うという方法が驚異の種らしい。字母から活字をとり出し、活字が冷えると縮むなど計算通りに運ばない」と金属活字鋳造の苦心を述べている。

加津佐で最初の印刷物を刊行している頃、イエズス会の布教やセミナリヨ、コレジヨなどの教育機関の所在が発見される恐れがあるため、キリシタン大名の中にはコレジヨなどを僻地に移すことをすすめる者もあった。ヴァリニャーノはその情勢を察知して協議会を開き、教育機関の多くを島原半島の領主有馬晴信の同意を得て加津佐から海を隔てた天草に移転することを決意したのである。天草のキリシタン大名の天草久種はその領内に教育機関を移し避難することを懇望していたので、この決定は直ちに天草に報告された。天草久種がイエズス会の教育機関のための提供してくれたのは、家屋が数軒と以前から所有していた家屋をもって60人近いイエズス会員と20人以上の同宿及び40人近い下僕を収容できるコレジヨを天草に設立した。このコレジヨについて「様式は外国風で優美である」と言われていたから洋風であったのであろう。ヴァリニャーノは天草でコレジヨの修道士を慰問すると共に、遣欧使節としてローマへ赴き同行して帰った伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンらをイエズス会員に進ませるため1591年7月に天草のノピシアド（修練院）に入所させた。しかし加津佐のコレジヨとの間を頼りに往復することになった。この時4人は「特別なる榮譽の人物」として紹介され、2年間の修練を卒えたとしてイエズス会員に加えられた。この年、加津佐のコレジヨではグーテンベルグ式印刷機と欧文活字を使って最初の印刷を始めた。天草へ移った4名はどのような生活をしていただろうか。伊東マンショはラテン語の初級クラス、千々石ミゲル、中浦ジュリアンは共にラテン語の学習中、原マルチノはラテン語を修了していて日本文学を勉強していた。当時ヨーロッパではどんな言葉が使われていたかと言えば、77%の膨大な量の書物がラテン語の本で占められていた位で次にドイツ語、イタリア語の順であった。ラテン語は今日では死語であるが500年前にはヨーロッパ最大の共通語であった。今から3000年前にローマ近郊に住みついた人々の方言であった。ローマ帝国が衰退してラテン語はその後分化して、イタリア語やフランス語、スペイン語になった。一方では昔からの聖書などに使われ中世以降は教養語とみなされていて、現在ではヴァチカン公国の重要な公用語として使われている。

さて、天草へ移転後のコレジヨ付属印刷所のスタッフは遣欧使節たちの帰国時にローマ

から印刷技術者として連れ帰ったイタリア人修道士ジョアン・パウティスタ・ペーチェが活版の植字や印刷の中心となり、パウティスタの活版印刷の補助として日本人修道士ペトロが従事していた。この他に同宿の何人かが補助として働いていたことと思われる。印刷所はコレジヨの中の離れた場所でラテン語と日本語のための印刷所が設けられた。ここで印刷された書物は9種類でこれを天草本と呼んでいる。これら天草本は国語或いはラテン語、ポルトガル語をローマ字によって表したものである。ローマ字といっても英語式のローマ字ではなくポルトガル語式のローマ字であって、例えば当時の日本人はハヒフヘホをファ・フィ・フ・フェ・フォと発音していたことがわかる。これらの天草本の書物は次の9種類が判明している。

1. ドチリナ・キリシタン	1592年	ローマ字
2. ヒデスの導師	1592年	ローマ字
3. 平家物語	1592年	ローマ字
4. 伊曾保物語	1593年	ローマ字
5. 金句集	1593年	ローマ字
6. ラテン文典	1594年	ローマ字
7. ラテン・ポルトガル日本の対訳事典	1595年	ローマ字
8. 心霊修業	1596年	ローマ字
9. ばうちずもの授けよう	不明	国字

これらの書物以外に刊行年月から天草において印刷されたと考えられる書物が8種類ほどあるがその所在は現在不明といわれている。将来日本や東洋、ヨーロッパでその書物が発見されるかも知れない。以下にキリシタン史研究家、今村義孝氏が調査された書物を列挙する。

1. キケロの演説抄	1592年	ローマ字
2. イエズス会会則	1592年	国字
3. 死者埋葬の次第	1594年	国字
4. 十章のドチリナ	1595年	国字
5. コンヒサンの手引	1595年	国字
6. ロザリオの唱え方	1595年	国字
7. トレント公会議の公教要現	1595年	ローマ字
8. コンテムプツス・ムンヂ	1596年	ローマ字

これら天草や長崎で印刷・出版された書物のうち奈良県の天理図書館には7種類が所蔵されている。即ち「ばうちずもの授けよう」、「精神修養の提要」、「おらしよの翻訳」、

「落葉集」、「ぎや・ど・ペかどる」、「こんてむつすむんち」、「太平記抜書」である。また東京の上智大学キリシタン文庫には「祈祷文」、「 sacrament 提要」が、水戸の徳川家には「ドチリナ・キリシタン」、東洋文庫には「ドチリナ・キリシタン」、「 sacrament 提要」が、長崎の浦上天主堂には「スピリツアル修業」がそれぞれ所蔵されている。

天草では6年間にわたり、イエズス会の印刷・出版事業を行ったが、移転3年目の1594年頃には新たにローマン体活字の大文字が天草で母型から鋳造された。この活字は1596年に印刷された書物「心霊修行」など2種類の書物に使用されたとされている。また右斜めに傾いたイタリック体活字が同じく1594年頃から3種類のポイント活字として鋳造され始めたと言われている。そして天草において印刷された「ラテン文典」らに使用された。

一方、天草の志岐にはセミナリヨ付属の銅版学舎があり5名の学生が在籍していて、銅版彫刻刀、凹版印刷器によって雇用の銅版画を印刷していた。「平家物語」など3種類の書物の扉絵を銅版に彫り、凹版印刷を行っていた。活字印刷と平行して凹版による印刷物の登場は驚きである。天草の印刷実務の中心は前述のパウティスタであったが、イエズス会のペトロゴメス管区長は1594年の書簡の中で「日本に必要なものとして、印刷に経験のある修道士の事です。日本の書物をローマ字と国字で印刷するのに誠に大切であるから、印刷所が適当な活動をするためにこの仕事に技術と経験のある修道士を用いなければなりません」と適当な人員の派遣をローマに要請している。しかしその半年後書簡によれば「本年は印刷機械の整備やらイタリック体活字の製造に追われ印刷はほとんど進捗していません。日本人は今まで父型や母型の製作には全然未経験とは言え、この方面にも器用な日本人は短期間で印刷に必要な全てのイタリック文字を製作してくれました」また「日本人同宿たちがローマ字の金属活字の鋳型に習熟し印刷に貢献し始めました」と報告している。一方、和文活字の方はどうであろうか、1591年刊行の「どちりなきりしたん」1592年刊行の「ばうちすもの授けよう」は日本文字体即ち国字本であるが、木を彫って作った木活字による印刷とされている。しかし専門家によると金属活字と言う見方がある。平仮名を精査するとそういう結論に達するという。ドワードは加津佐の印刷所の頃に金属活字に挑戦している旨記しているようである。このようにしてイエズス会天草コレジヨ付属印刷所は1591年秋より6年間にわたって各種の書物、いわゆるキリシタン版であり天草版といわれる書物の印刷と出版をつづけたのである。

イエズス会の天草で印刷・出版事業を始めて5年目の1596年に、コレジヨに危機が近づいてきた。即ち10月中旬にスペイン船が土佐沖に漂着してその船の水先案内人の話から「スペインのキリスト教布教が信者を増やしたところで軍隊を派遣して上陸地を占領するという国土征服的手段ではないか」という疑いを、時の関白豊臣秀吉側に抱かせて秀吉が激怒したことから、キリスト教の弾圧が始まった。その頃秀吉は長崎港を開いて、海外貿易による利益の独占を計っていたからキリスト教の弾圧を行いながら南蛮貿易の存続と運営にはイエズス会の存続は必要であるとの考えであった。ところがドン・ヘドロマルチネス主教が日本の主教に任命され、来日して秀吉表敬訪問した後に天草を訪れて、第一に天



草のコレジヨとノビシアドを破壊すること。そこにいる宣教師、修道士たちが奉行の布告を遵守すると見せかけるため長崎に集まることを決定してしまった。その決定に従って天草のコレジヨは印刷機械一式と勉学中の修道士や同宿と共に1597年秋、6年間住んだ天草を離れ長崎へ移転した。移転先は長崎のトードス・オス・サントスの教会で、現在の春徳寺のところであった。ただし天草のコレジヨは破壊されることなくその施設はこの後も利用されることになった。

長崎は一時期ポルトガルの領土になったことがある。キリシタン大名の肥前の領主、大村純忠が長崎を含めた地域の領主であった頃長崎をイエズス会に贈ったのである。しかしその後、豊臣秀吉が取り戻した経緯がある。長崎は1571年の頃に六つの町を中心にしてすでに発展していた。秀吉は1587年奉行寺沢広高を任命して長崎を支配させた。秀吉の死後1598年から1614年までの17年間は徳川家康が禁教令を出すまで長崎のイエズス会の教会は黄金時代であった。この時代コレジヨは日本の教会の文化と宣教の中心であった。1598年に秀吉が亡くなって教会はある程度自由になった。丁度長崎の教会の諸活動が布教事業を着々と功を奏した頃、コレジヨは岬の新しい教会の建築を始めた。1598年の暮れか1599年の春に岬の教会へ移転した。現在の長崎県庁のところである。コレジヨには司祭や修道士が50名位いてコレジヨの側には家が建てられ、セミナリヨの生徒が80名余りが居住していた。また同宿といって諸仕事や文書の作成、画学舎や付属印刷所の従事者がいて、同宿の身分で印刷や活字の彫刻等の仕事を学んでいた者が40名位いた。この頃に印刷所が新築された。1598年のイエズス会の年報によれば「印刷所が新築された後、印刷・出版事業は何ヶ月も中止していたが、仕事を完全に止めることなく同宿と修道士の働きで和文活字2,000本の父型と母型を製作したので、活字鑄造が出来、キリスト教について信者とイエズス会員の利益を助ける本を印刷・出版することが出来る」と報告している。また1597年2月3日に経由地変えて出された手紙（ローマへの手紙は途中の危険を分散するため経由地を変えたと考えられる）によると、コレジヨ付属印刷所についてメスキータ・コレジヨ院長は次のように述べている。「ここで非常に立派で大きな印刷所が設置され既に整備されています。日本人修道士と同宿達の働きで金属活字の父型と母型が製造されています。日本人は優秀で手先が器用なのでよく出来ています。既に色々な本が発行され1,500部の告解のための小冊子が印刷済みで、「ぎあ・ど・ペかどる」が和訳されて日本語活字で印刷中です。紙は薄いので一面にだけ印刷されます」また同時に「欧文活字の父型、母型を上手に製作するのでイタリアからお送り下さる必要はありません」と。また原マルチノ神父は1603年当時、翻訳出版の仕事で非常に多忙であるという。長崎のコレジヨ付属印刷所で印刷事業を支えていた人に市来ミゲルがラテン語と日本語の活字彫刻に従事していたし、この他イエズス会の名簿によると次の主な従事者の名前が記録されている。

1603年（長崎）ニコラオ・デ・アヴィラ	ローマ字活版印刷係
” ジョアン・パウティスタ・ペーチェ	印刷係
” イチク・ミゲル	印刷の手伝い

尚、1603年、コレジヨ付属印刷所と画家のセミナリヨがあって同宿は60名位とある。

1607年（長崎）ニコラオ・デ・アヴィラ 印刷係

” ジョアン・パウティスタ・ペーチェ 印刷係

1613年（長崎）ジョアン・パウティスタ・ペーチェ 印刷係

長崎へ移転したコレジヨ付属印刷所では1598年から印刷・出版事業をつづけて次の15種類の書物を刊行した。

1. 落葉集	1598年	国	字
2. サルヴァートル・ムンディ	1598年	国	字
3. ぎや・ど・べかどる	1599年	国	字
4. ドチリナ・キリシタン	1600年	ローマ字	
5. 倭漢朗詠集	1600年	国	字
6. おらしよの翻訳	1600年	国	字
7. どちりな・きりしたん	1600年	国	字
8. 金言集	1603年	国	字
9. 日葡辞典	1604年	ローマ字	
10. 日本文典	1604年	ローマ字	
11. サクラメント提要	1605年	ローマ字	
12. スピリチュアル修業	1607年	ローマ字	
13. 聖教精華	1610年	ローマ字	
14. ひですの経	1611年	国	字
15. 太平記抜書	不明	国	字

長崎で新しく鑄造した活字を使って「サルヴァートル・ムンディ」と題する宗教書のざんげの書物を刊行した。草書体の漢字と平仮名による半紙判の書物である。つづいて1598年から3年かけて「落葉集」を刊行した。落葉集は漢字の読み方と字形を知るための辞書であって、行草体の漢字と平仮名の半紙判の横19センチ、縦26.4センチで109葉（枚）の書物である。その後1600年になってコレジヨ付属印刷所は、経済的な理由のため和文の印刷所と欧文の印刷所の二カ所に分かれることになった。即ち日本語字の本はキリシタンの後藤宗印に委託された。彼はこの本を販売して経費を出した。この和文の印刷所はイエズス会サンチャゴ病院の付属の建物にあった。

また欧文の印刷物を担当するラテン語あるいはローマ字で書かれた日本語の本はイエズス会員の教育のためにコレジヨ付属印刷所で印刷された。前述の和文の鑄造活字はすべて後藤宗印の印刷所へ引き渡された。ここで印刷された書物の第一は1600年刊行の「おらしよの翻訳」と「どちりなきりしたん」。それに1611年刊行の「ひですの経」である。後藤宗印は南方のブルネイやタイと貿易を行っていた人物で1611年を最後にイエズス会の書物は全く刊行を断ってしまった。これは徳川幕府のキリシタンへの迫害が苛烈になった結果で、後藤宗印は印刷所を閉鎖して16年後、長崎から江戸へ護送され80余歳で病没した。

1610年にイエズス会に大きな影響をもたらした事件が勃発した。1610年長崎港に入港したポルトガルの大型帆船が悲惨な最後を遂げたことである。その理由はマカオでポルトガル人と日本人の間に争闘の事件が起きて双方に死者が出てしまった。このことを知った徳川幕府は激怒して、マカオの司政官を兼ねた大型帆船の船長はじめ高位の船員を死刑に処して船の没収を決めたのである。そしてその処罰をかつてのキリシタン大名の有馬晴信に一任した。有馬軍は1,000名を越す兵を長崎に向かわせ、船隊を組んでポルトガル船に立ち向かい砲撃を始めた。ポルトガル船も反撃して最後には船の火薬庫に引火して大音響とともに爆発し、水深75メートルの長崎港沖に沈没した。ポルトガル船は船長はじめ乗組員ら100名余が死亡し、有馬軍も100名を越える兵が死亡したという。このような最後を遂げたポルトガル船の積荷もろとも海底に沈んだその価値は金100万タエス近くであったと推定されている。60年間にわたり続いた南蛮貿易と友好の関係はこれにより最後を遂げるようになった。さらにイエズス会や日本の教会全体にとって大きな経済的打撃を受けた。この事件によってイエズス会はその収入を貿易に頼っていた性格上、補助金のすべてを失い、財政は借金だらけとなった。さらにこれらの損失を回復する見込みも消えてしまったのである。補助金をすべて失ってしまったので、イエズス会の教育機関の運営にも困り、コレジヨやセミナリヨで日本の教会の協力者として育成していた同宿の人たちを解雇しなければならなくなった。コレジヨの印刷所でも従事者の雇用に大きな影響が出たのである。この後、徳川幕府はイエズス会や教会に対してこのポルトガル船事件に対する怒りが治まらず、再三繰り返し宣教師たちに日本から退去するよう命じてきた。1614年になって徳川幕府は禁教を徹底するため、在日の教団および主要な日本人のキリシタンをマカオ及びマニラに追放することになり、グーテンベルグ式印刷機や活字など諸器材は長崎港からマカオのサンパウロ学院に運ばれた。原マルチノやドラードも印刷機と共にマカオへ渡ったのである。加津佐で「サントスの御作業の内抜書」の印刷を主導し日本最初の活版印刷の書物を製作したドラードは2年後司祭に叙せられ、その後マカオのセミナリヨの院長に任ぜられたが、1620年マカオで病死した。一方加津佐のコレジヨ以来、各種書物の編集や翻訳で多忙な日を送っていた原マルチノは、その後も出版事業にいそしみ60歳まで生き延びたが1629年マカオで病死した。

偉大なるイエズス会巡察使ヴァリニャーノは日本への印刷技術の導入を企画して、九州各地で活版印刷によるイエズス会の印刷・出版事業を推進したが、3度の来日後1603年日本を離れ中国進出を企てたが、1606年尿毒症に罹り、同僚たちにみとられ逝去した。さらにつけ加えれば伊東マンショは司祭に叙せられたが4年後、長崎のイエズス会学院で病没した。千々石ミゲルは肥前の領主大村喜前に仕えたがキリスト教を棄てた。彼は領主に対しキリスト教は「後世の菩提の理を説くが、実は国を奪うはかりごと」と進言していた。中浦ジュリアンは司祭に叙せられた後、死を覚悟して九州に踏みとどまり、19年後に殉死した。

巡察使ヴァリニャーノ、天正遣欧使節、そしてドラードといえれば日本へ最初にグーテン

ベルグ式印刷機を導入した人たちであるが、そのどっしりとしたグーテンベルグ式印刷機はレプリカではあるが、加津佐町の町民図書館、天草の河浦町のコレジヨ館、長崎市の純心女子大学キリシタン文庫に展示してある。更に海を渡ってマカオの博物館にも展示され、イエズス会の加津佐版、天草版および長崎版の書物刊行の史実から400年前に思いを馳せることが出来る。

## 参考資料

松田毅一	: 天正遣欧使節	1999年
川田久長	: キリシタン版とプロテスタント版	1960年
結城了悟	: 天正遣欧使節史料と研究	1993年
中根 勝	: 日本印刷技術史	1999年
朝日新聞社	: ラテン語復権	1999年
小島幸枝	: キリシタン版の書物と日本文化	1992年
望月洋子	: 加津佐物語	1994年
今村義孝	: 天草学林とその時代	1990年
純心女子短期大学	: 長崎のコレジヨ	1985年
長崎地方文化史研究所		
H. チークリス	: 日本史小百科	1997年
長崎県教育委員会	: 長崎のキリシタン学校	1987年
八木書店・文庫の会	: 古本屋の見たヨーロッパ本の旅・歴史の旅	1983年
長崎文献社	: 長崎事典・歴史編	1982年
教文館	: 日本キリスト教大辞典	1988年
結城了悟	: 大村史談・天正少年使節の日記	1983年
北海道新	: 世界舞台紀行	1996年